



Title	韓国人日本語使用者の言語間・場面間談話スタイル切り換え
Author(s)	金, 道瑛
Citation	大阪大学, 2024, 博士論文
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/96170
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

論文内容の要旨

氏名 (金道瑛)	
論文題名	韓国人日本語使用者の言語間・場面間談話スタイル切り換え
論文内容の要旨	
<p>本稿は、二言語話者である日本滞在中の韓国語母語話者（以下、韓国人日本語使用者）を対象に、談話レベルにおける言語間・場面間スタイル切り換えについて、対人関係の視点から考察するものである。具体的には、使用言語（日本語・韓国語）と談話相手との関係（年齢上・年齢下）をクロスさせた4つの場面におけるスタイル切り換えについて論じる。</p> <p>スタイル切り換え研究ではこれまで、語、発話、談話の各レベルに渡り、その成果が蓄積されてきたが、談話レベルにおけるスタイル切り換え研究は他のレベルに比べて遅れており、特に特定発話行為に注目する既存の研究では、談話自体を成立させるための談話構成要素は取り上げられることがほとんどなかったようと思われる。しかし、朴成泰（2018）のような先行研究では、相づちなど、談話成立のための談話構成要素も言語間・場面間で切り換えられることが指摘されている。</p> <p>また、学習者を対象にした談話レベルのスタイル切り換え研究においては、切り換えの要因として、①学習言語の学習・習得、②母語からの転移の2つを挙げている。一方、Maeshiba, Yoshinaga, Kasper & Ross (1996) や李善雅（2001）のような研究から、学習者は言語レベルが上がるにつれ母語からの転移が少なくなることが予想される。その上に、談話自体を成立させるための談話構成要素は、学習言語の規範に従わないと誤用と受け取られる文法レベルの言語項目とは違い、比較的個人の選択の自由が利くものであると言えよう。したがって、上級学習者は母語と学習言語の規範をどちらも理解し、対人関係に応じて談話レベルのスタイルを方略的に切り換える可能性がある。これまでの研究では、学習者がこのように主体性を持って談話レベルにおけるスタイルを切り換える事象が注目されていないように思われる。</p> <p>本稿ではこのような背景から、韓国人日本語使用者の日本語を単に韓国語からの転移が起こったか、それとも日本語の使用規範に従ったかを見るのではなく、各インフォーマントが言語間・場面間でどのように能動的に対人関係を構築するか、すなわち、「スタイルを切り換える」かに焦点を当てて分析していく。そのため、以下のような研究の目的を設定した。</p> <p>(A) これまでスタイル切り換え研究の対象とされなかった談話レベルのスタイル切り換えについて、言語間・場面間でどのようなものが、どのように切り換えられるか、その実態を整理する。</p> <p>(B) (A)の結果に沿って、これまで明らかになった日本語・韓国語のスタイルを個人がどのように活用しているか考察する。その上で、韓国人日本語使用者が行う日韓の対人関係との関係を説明する。</p> <p>(C) 談話レベルで行われるスタイル切り換えと他のレベルで行われるスタイル切り換えの異同について述べる。</p> <p>本稿は第1部の序論、第2部の本論、第3部の結論の構成をとる。序論の第1部（第1章、第2章）では、先行研究と研究の目的、調査の概要と分析の方法について述べる。まず、第1章では先行研究を踏まえ、本稿における談話レベルのスタイル切り換えを定義し、本稿の目的について述べる。次の第2章では調査の概要について述べる。インフォーマントや場面設定など、本稿で使用するデータについて説明し、文字化の方法と6つの分析項目、分析の枠組みを説明する。特に、分析の枠組みでは対人関係の観点から、2つのスタイルを枠組みとして設定した。すなわち、①相手に言語的な配慮をしたり、談話参加の機会を与える「相手焦点的スタイル」、②相手に向かう言語的配慮が薄れたり、相手に談話参加の機会を与えない「自己焦点的スタイル」の2つである。</p> <p>続く第2部（第3章から第8章）は各論として、各章では韓国人日本語使用者のスタイル切り換えを、第2章で設定した分析項目ごとに論じる。具体的には、第3章では話題選択、第4章では発話量、第5章では談話参加、第6章では情報提供・情報要求、第7章では発話内容確認、第8章では相づちという項目を分析し、各項目で韓国人日本語使用者が行う、言語間・場面間のスタイル切り換えを、対人関係の観点から考察する。</p>	

第3章では話題選択の切り換えについて分析し、話題内容の選択や新しい話題を開始する仕方が言語間・場面間でどのように切り換えられるか考察した。その結果、3人の韓国人日本語使用者は、日本語談話では相手焦点的スタイル、韓国語談話では自己焦点的スタイルと、言語間スタイル切り換えを行っていた。また、各言語内の場面間においてはそれぞれ異なるスタイル切り換えを行っており、個人差が見られた。

第4章では発話量について、主に談話参加者同士の発話量の割合から、韓国人日本語使用者が言語間・場面間で相対的な発話量をどのように調整し、切り換えるのかを分析した。その結果、2人の韓国人日本語使用者は、各言語で場面間スタイル切り換えを行っており（日本語：自己（年齢上）↔相手（年齢下）／韓国語：相手（年齢上）↔自己（年齢下））、またその傾向が言語ごとに異なることから、言語間でもスタイル切り換えを行っていることが明らかになった。一方、残り1人の韓国人日本語使用者の結果からは言語間スタイル切り換え（日本語：自己／韓国語：相手）のみが見られた。

第5章の談話参加の切り換えでは、談話の中で一人だけ長く話すモノローグ区画と、参加者同士で交代に話すダイアローグ区画の割合について分析した。その結果、2人の韓国人日本語使用者は、言語間・場面間スタイル切り換えを行っていた（日本語：自己（年齢上）↔相手（年齢下）／韓国語：相手（年齢上）↔自己（年齢下））。一方、もう1人は言語間でのみスタイル切り換えが見られた（日本語：自己／韓国語：相手）。

第6章では情報提供・情報要求の切り換えを分析した。情報提供は質問されなくても自ら持っている情報を相手に話すこと、情報要求は主に質問によって相手が持つ情報を話させることである。分析の結果、2人の韓国人日本語使用者は言語間・場面間切り換えをしていた（日本語：自己（年齢上）↔相手（年齢下）／韓国語：相手（年齢上）↔自己（年齢下））。もう1人は言語間切り換えが目立ち（日本語：自己／韓国語：相手）、場面間切り換えは母語の韓国語談話のみで見られる（相手（年齢上）↔自己（年齢下））。

第7章では発話内容確認（他者開始）の切り換えについて、その形式とストラテジーを分析し、韓国人日本語使用者がそれらをどのように切り換えていたか考察した。その結果、3人の韓国人日本語使用者はそれぞれ異なる言語間・場面間スタイル切り換えを行っていた。

第8章では相づちの出現率（頻度）、位置（タイミング）に注目し、韓国人日本語使用者が言語間・場面間で相づちの使用をどのように切り換えるか分析する。その結果、2人は言語間ではスタイル切り換えを行わず、両言語で同様の場面間でのみスタイル切り換えを行い（相手（年齢上）↔自己（年齢下））、残りの1人は言語間・場面間でスタイル切り換えを行っていた（日本語：自己（年齢上）↔相手（年齢下）／韓国語：相手（年齢上）↔自己（年齢下））。

最後に、結論の第3部（第9章）では第2部で項目別に分析した結果をインフォーマントごとに総合し、各インフォーマント、ひいては韓国人日本語使用者がどのようなスタイル切り換えを行っているかを対人関係の側面から考察する。さらに、その考察をもとに、既存のスタイル切り換えの研究に談話レベルのスタイル切り換えを位置づけることを試みる。その結果、以下のことを明らかにした。

韓国語談話では（A）既存の先行研究で指摘された韓国的な談話スタイルは目下の相手に使用され、目上の相手には適切な距離をとり丁寧さを保つ談話スタイルに切り換える。（B）韓国語談話では多くの項目で類似する切り換えの様相が観察されるが、その一方で個人によって相違点も見られる。

日本語談話では（C）「年齢の上下」という大きな基準はミスコミュニケーションの危険度が少ないため、その基準を日本語談話にも同様に適用する、つまり、転移する。（D）既存の先行研究で指摘された日本的な談話スタイルは目下の相手に使用され、目上の相手には距離を縮める談話スタイルに切り換える。（E）日本語談話においてもインフォーマント間の相違点が見られ、韓国語談話に比べて相違点が見られる項目がより多い。

また、談話レベルにおけるスタイル切り換えについては、次のようなことを主張する。（F）談話レベルにおけるスタイル切り換えでは、語・発話レベルのスタイル切り換えのように明確な切り換えは起こらない。（G）韓国人日本語使用者の日本語における談話レベルのスタイルには、学習・習得と転移という両方の要因が見られる、また、これまでの研究で指摘された負の転移よりは、転移しても問題を起こさない部分において正の転移が目立つ。

以上で、本稿では、スタイル切り換えの一面である談話レベルのスタイル切り換えについて、一部ながら明らかにすることことができた。特に、既存の先行研究からあまり扱われることがなかった談話自体を成立させる談話構成要素もスタイル切り換えの対象になり得ることを指摘し、二言語話者が言語間と場面間で対人関係の調整のために、どのようにスタイルを切り換えるかを明らかにした。

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　(　金　道瑛　)	
	(職)　　氏　名
論文審査担当者	主　査　　大阪大学　教授　　渋谷　勝己 副　査　　大阪大学　教授　　高木　千恵 副　査　　大阪大学　教授　　マシュー　バーデルスキー
	副　査

論文審査の結果の要旨

以下、本文別紙

論文内容の要旨及び論文審査の結果の要旨

論文題目： 韓国人日本語使用者の言語間・場面間談話スタイル切り換え

学位申請者 金 道瑛

論文審査担当者

主査	大阪大学教授	渋谷 勝己
副査	大阪大学教授	高木 千恵
副査	大阪大学教授	マシュー バーティルスキー

【論文内容の要旨】

本論文は、日本語を第二言語として習得し、それを日常的に使用する韓国人日本語使用者3名をインフォーマントとして、それぞれのインフォーマントが、親しい友人と、母語である韓国語で行う談話と第二言語である日本語で行う談話（言語間）、またそれぞれの言語による談話について年上の話者と行う談話と年下の話者と行う談話（場面間）の、計4種類の談話を収集し、4種類の談話間でその使用するスタイルをどのように切り換えるかを、談話レベルの言語事象を分析項目として、とくに対人関係の管理という観点から分析を試みたものである。3部9章より構成され、本文A4判187ページの分量である。

「第I部 序論」は2章からなる。第1章では、これまで行われてきたスタイル切り換え研究についてレベルごとに整理するとともに、本論文の立場と課題を提示している。第2章では、最初に調査の概要と文字化の原則、分析項目を述べ、次いで、分析の枠組みとして、本論文全体の結論の一部を先取りするかたちで、インフォーマントが切り換える、「（相手を配慮したり、相手に談話に参加する機会を与える）相手焦点的スタイル」と、「（相手に対する配慮の意識が薄れ、話し手中心に談話を展開する）自己焦点的スタイル」の2つのスタイルを設定している。以下の分析は、この2つのスタイルの切り換え行動という、一貫した視点からなされている。

「第II部 本論」は、各インフォーマントが4種類の談話のあいだで談話レベルのスタイル切り換えをどのように行ったか、その実態を項目ごとに分析した6章で構成されている。第3章では、以下の分析の基礎をなす話題選択の切り換えについて分析し、3名のインフォーマントとともに言語間でスタイル切り換えを行っていること、また、各言語内の場面間においてはそれぞれ異なる様式でスタイル切り換えを行っており、個人差があることを明らかにしている。続く第4章では、インフォーマントが言語間、場面間で発話量をどのように切り換える（調整する）かを分析し、2名については言語間、場面間の両者で切り換えを行っているのに対して、1名については言語間でのみ切り換えを行っていることを明らかにした。第5章は談話参加方法の切り換えのあり方を、談話のなかで一方の参加者が長く話すモノローグ部分と、参加者が交互に話すダイアローグ部分に分け、その割合によって分析したところで、2名が言語間、場面間で切り換えていたのに対し、1名は言語間でのみ切り換えていることを見出している。第6章では、談話のなかでインフォーマントは、相手に情報を提供することが多いか、相手の情報を質問によって要求することが多いかを分析している。その結果、2名は言語間、場面間でスタイル

を切り換えていたのに対し、1名は言語間の切り換えが目立ち、場面間の切り換えは母語の韓国語談話でのみ見られたことを述べている。相手の発話の内容を確認する行為（他者開始修復）を分析した第7章では、内容を確認するのに使用された形式とストラテジーを分析し、3名とも異なる様式で言語間、場面間のスタイル切り換えを行っていたことを明らかにした。本論最後の第8章では相づちの出現率（頻度）と位置（タイミング）を取り上げて分析し、2名は日韓の談話ともに場面間でのみスタイル切り換えを行い、1名は言語間、場面間の両者でスタイル切り換えを行っていたことを解明した。

第3部第9章は第2部の6つの章で事象ごとに分析した結果を総合した部分であり、①各章において事象ごとに分析した談話レベルにおけるスタイル切り換えのあり方をインフォーマントごとに集約するとともに、②3名のインフォーマント間の共通点と相違点（個人差）を整理している。加えて、③これまで明らかにされてきた音声や形態、語彙、発話行為などの他のレベルのスタイル切り換えのあり方と比較し、結論として、談話レベルのスタイル切り換えは、他のレベルの切り換えのように明確には行われないこと、また、日本語談話については目標言語のスタイルが習得されているところと母語からの転移が生じているところの両者があるが、後者については正の転移が目立つこと、などを指摘している。

【論文審査の結果の要旨】

本研究は、日本語を第二言語として習得した韓国人日本語使用者が行うスタイル切り換えのあり方を、「日本語談話—韓国語談話」、「年上との談話—年下との談話」をクロスさせた計4種類の談話状況を設定し、3名のインフォーマントからそれぞれこの4談話を収集して詳細に分析を加えたものである。従来のスタイル切り換え研究は、切り換えのあり方が比較的捉えやすい、音声や形態素、語彙、勧誘・依頼等の発話行為のレベルに注目するものが多かった。これらの個々の言語要素、表現の切り換えは、実際にはより高次にある談話レベルのスタイルが選択されたなかで行われるものであり、後者を先に解明すべきであるが、そもそも談話スタイルを把えるための分析の観点や方法が確立しておらず、研究が遅れている領域であった。本論文は、韓国人日本語使用者が行う話題選択、発話量の調整、談話参加、情報提供・情報要求、発話内容確認、相づちなどの行動に注目することによって、談話レベルでなされるスタイル切り換え行動の様相を解明しようとした意欲的な試みである。結果として、連続的、相対的なものではあるが、複数の分析項目を貫く「相手焦点的スタイル」と「自己焦点的スタイル」という2つのスタイルを取り出し、談話レベルのスタイル切り換えのメカニズムを提示することに成功している。

ただし、本論文には問題点がないわけではない。たとえば、本論文で言う「スタイル」が、社会言語学の多くの研究が言う「スタイル」と同じものか、それともポライトネス理論の言う会話のその場その場で使用するストラテジーに近いものか、さらなる検討が必要である。関連して、本論文では、切り換えのあり方はインフォーマントが主体的に決定するという観点で分析されているが、話題の選択や発話量などの操作は相手の行動によって左右されるところが大きく、インターアクション、会話の共同構築という観点も求められるはずである。また、談話レベルの事象の切り換えのあり方は相対的であることもあり、提示された調査結果（数字）の解釈が恣意的に行われているように見える箇所も散見された。個々の発話の質的な分析を組み合わせる必要があるところである。その他、母語行動と第二言語行動を同一次元で議論してよいかといった問題についても議論がほしかった。

このようにいくつかの問題点は残されているが、これらはむしろ、今後の発展のための課題として捉えられるべき性質のものであって、多言語話者の言語間、場面間のスタイル切り換えのあり方を談話レベルに注目して総合的に解明しようとした本論文の本質的な価値を損なうものではない。よって、本論文を博士（文学）の学位にふさわしいものと認定する。